

妄想

森鷗外

もくぜん

目前には広々と海が横はつてゐる。

その海から打ち上げられた砂が、小山のやうに盛り上がつて、自然の堤防を形づくつてゐる。アイルランドとスコットランドとから起つて、ヨオロッパ一般に行はれるやうになつた <sup>ドユウン</sup> d <sup>ことば</sup> といふ語は、かういふ處を斥して言ふのである。

その砂山の上に、ひよろひよろした赤松が <sup>むら</sup> 簇がつて生えてゐる。余り年を経た松ではない。

海を眺めてゐる白髪的主人は、此松の幾本かを切つて、松林の中へ <sup>は</sup> 嵌め込んだやうに立てた <sup>こいへ</sup> 小家の <sup>ひとま</sup> 一間に据わつてゐる。

主人が <sup>も</sup> 元と世に立ち交つてゐる頃に、別荘の真似事のやうな心持で立てた此小家は、只二間と台所とから成り立つてゐる。今据わつてゐるのは、東の方一面に海を見晴らした、六疊の居間である。

据わつてゐて見れば、砂山の <sup>そは</sup> 岨が松の根に縦横に縫はれた、殆ど鉛直な、所々 <sup>なかくぼ</sup> 中窪に崩れた断面になつてゐるので、<sup>はて</sup> 只果もない波だけが見えてゐるが、此山と海との間には、一筋の河水と <sup>いつたい</sup> 一帯の <sup>なかす</sup> 中洲とがある。

河は <sup>うくわい</sup> 迂回して海に <sup>そそ</sup> 灌いでゐるので、<sup>そは</sup> 岨の下では甘い水と

から  
鹹い水とが出合つてゐるのである。

砂山の背後うしろの低い処には、漁業と農業とを兼ねた民家が  
疎まばらに立つてゐるが、砂山の上には主人の家が只一軒ある  
ばかりである。

いつやらの暴風に漁船が一艘は跳ね上げられて、松林の松  
の梢こずゑに引つ懸かかつてゐたといふ話のある此砂山には、土地の  
ものは恐れて住まない。

河は上総かつさの夷いしみがはである。海は太平洋である。

秋が近くなつて、薄靄うすもやの掛かつてゐる松林の中の、清い  
砂を踏んで、主人はそこらを一廻りひとめぐして来て、八十八とい  
う老僕こしらの拵あさげへた朝餉をしまつて、今自分の居間に据わつた  
処である。

あたりはひつそりしてゐて、人の物を言ふ声も、犬の鳴  
く声も聞えない。只朝風あさなぎの浦の静かな、鈍い、重くろしい  
波の音が、天地の脈搏みやくはくのやうに聞えてゐるばかりである。

丁度わたり径一尺位に見える橙黄色たうわうしよくの日輪にちりんが、真向うの水と  
空と接した処から出た。水平線を基線にして見てゐるので、  
日はずんずんのぼ升つて行くやうに感ぜられる。

それを見て、主人は時間といふことを考へる。生といふ  
ことを考へる。死といふ事を考へる。

「死は哲学の為めに真の、<sup>ふ</sup>氣息を嘘き込む神である、導きの神 (Musagetes) である」と Schopenhauer は云つた。主人は此語<sup>ことば</sup>を思ひ出して、それはさう云つても好からうと思ふ。併し死といふものは、生といふものを考へずには考へられない。死を考へるといふのは生が無くなると考へるのである。

これまで種々の人の書いたものを見れば、大抵老が<sup>おい</sup>迫つて来るのに連れて、死を考へるといふことが段々切実になると云つてゐる。主人は過去の<sup>おい</sup>経歴を考へて見るに、どうもさういふ人々とは少し違ふやうに思ふ。